

(翻訳) LIS教育におけるインターンシップ

経験学習についての国際的な展望

Bird, Nora J., Clara M. Chu and Fatih Oguz. "Internship in LIS Education: An international perspective on experiential learning," *IFLA Journal*. Vol.41, No.4, 2015.12, p.298-207.

小出 晋之将 (文学研究科比較文明学専攻)

要旨

図書館情報学（以下 LIS）教育における経験学習という形でのインターンシップの価値について、北米では何年も討論されてきた。国際的な展望獲得のため、近年の調査対象となっているのは、そうした経験が要求されているのか否か、そして何の理由でプレースメントが国際的もしくはヴァーチャルになされ得るのか、またそもそもそれは可能なのか否か、である。世界中の 69 の異なる国々から、国立図書館、図書館協会、及び専門図書館が学際的な図書館情報学調査へと参加した。

その結果が意味するものとして、アメリカ図書館協会（以下 ALA）の正式認可を受けた施設を除外すればインターンシップはより頻繁に要求されており、そうでない場合は参加率が低いとされていた。加えて言うならば、国際的な経験のために、より手厚い支援があった。LIS 教育を配信するオンラインツールの使用数は増加しているにもかかわらず、ヴァーチャルなインターンシップのための組織的な支援には明白な欠如がみられる。そして、21 世紀の LIS 教育におけるインターンシップのための学際的、計画的、相互接続的、国際的なモデルを示そうという提言が更なる調査のために出された。

序

インターンシップは、学生に専門職と、彼らの日々の行動、そして組織的な環境下での課題を見せることによって、専門職育成の中で重要な機能を果たす。こうした機会に参加した学生は自分が選択した専門職についてより良い理解を獲得するし、理論と実践とをより良く関連付けることができる (Coleman, 1989; Kolb, 1984; Kolb et al., 2000; Schön, 1983, 1990)。加えてこうした学生は観察・参加双方を経ることで、現場で直面する問題の分析により長けており、また実行可能な解決を創造することが上手くなる。教室の外で獲られる専門職としての経験は、学生の、自信という個人的な感覚のみならずコミュニティに貢献しているという感覚——これは創造性を可能にし得るようなものだ——も向上させる (Sen and Ford, 2009)。

経験学習を通じて、インターンシップは未来の LIS の専門職を現場へと導き、また彼らと専門的な仕事のリアルな世界にいる未来の同僚たちとをうまく関わらせるようにするものであり、その恩恵は学生にのみ生じるものではない。

例えば LIS プログラムはインターンシップ経験の結果を用いることによって、カリキュラムを評価し現在の実践に合わせ、調整するために役立つのだ。加えて実習生と関わる実務者は自身の技術を新たにし、最新の研究や自身の仕事への理論的アプローチに改めて繋げ直す機会を得る (Bird and Crumpton, 2014)。

仕事の職場での経験の相対的な重要性については LIS 教育においてその当初からアメリカ合衆国で討論されてきている (Crowley, 2004; Grogen, 2007)。

Library Journal で John Berry (2005) により行われた以下のような声明は現在も継続中の討論を示している。「就職希望者や普段は教室にいる学生やその教職員たちにとって専門職の実践の中での経験が大変価値あるものだということを考慮すれば、インターンシップは間違いなく我々の専門の修士号へと導くどんなプログラムにとっても必須の要件となるべきだ」。同時に、調査報告書が示す事として、LIS プログラムは、インターンシップやその他の職場経験を要求してはこなかった (Hall, 2009)。

アメリカ以外の国での議論が少ない一方で、インターンシップが一般的な実践になっているドイツにおいては最も注目に値することなのだが、それらの経験の価値や、こうした経験がますます相互接続しヴァーチャル化する世界においていかにして行われ得るのか、についての議論は未だに健在である (Ratzek, 2006)。

2011 年には、よりグローバル化する世界で役立つだろうインターンシップ経験の可能性の再概念化が提示された。すなわちその可能性を計画的で、相互接続的で、学際的で、国際的なものとしてイメージするような再概念化である (Bird et al., 2011)。これは、以上の特性を、様々な国々が LIS 教育のこの重要な側面をどのように捉え、またどのように実践しているのかということを比較し、国際的なレベルで検討するために調査方法論を利用する現在の研究に枠組みを提供している。その研究を先導している主要な問いは以下のとおりであった：

1. LIS 教育のために必要とされるインターンシップの状況とは国際的にはどのようなものであるか？
2. ヴァーチャルなインターンシップや国際的なインターンシップ以外の選択肢はありうるのか？

文献レビュー：経験学習とインターンシップ

LIS カリキュラムとその内の実践ベースの訓練の役割に焦点を当てた研究調査は、「インターンシップ」という語を「職場経験」、「現場での仕事」あるいは「実習」と同じ意味で用いている。Coleman (1989) のインターンシップの定義はその本質を捉えているように思える。それは即ち、インターンシップとは「相対的に見ると短期間の間に、専門職に監督されている職業経験であり、これは学校のカリキュラムの一部として提供され、学術的連続性（もちろん実務なわけだが）の間に積まれていく」。Grogan (2007) によるイギリスとアメリカの特徴について深く掘り下げられた研究では、職業経験の要素提示者たちと現場経験のための多くの要求との間には常に相互で議論が巡っていることが示されている。こうした議論において、要求されているプレースメントが利益や厳格さを欠いていることに気付いていた学生たちが最も騒々しい反対者であった。

LIS カリキュラムの中での図書館員の訓練は、合衆国や国際図書館協会連盟 (IFLA)、教育訓練部門のような国際的領野において、長年の間常に研究され、討論されてきた。まず北米的な観点の研究が指し示すものとして、理論と実践との橋渡しは合衆国におけるライブラリースクール設立以前から既に議論の争点であった (Grogan, 2007; Howden, 1992)。対称的にドイツにおいては、実習の希望者のために準備することが重視され、広いインターンシップを通して教育プログラムに組み込まれた実践的学習が議論されている (Ratzek, 2006)。

北米では、正式認可を受けた修士号学位授与教育機関のためのアメリカ図書館協会によって広められた基準が理論と実践との統合を強調していた (American Library Association,

1992, 2008) が、インターンシップを要求するまでには至っていなかった。

よって、学生にとっては卒業の前に現実的な世界という次元での図書館経験を獲得し習得することが期待されていたので、図書館プログラムはしばしばこのニーズに、様々な経験学習の機会を具体化することで応えてきていた (Ball, 2008)。

例えば、実践的な課題、企画、あるいはサービ斯拉ーニングがそうである。講座基調での経験的な活動は、情報組織の問題に応用可能な解決策を見出すことを通して、職場での経験に似せることを目的としてデザインされている。

その過程の中で学生たちは、授業課題を達成しつつ、現場で用いられる道具を使った経験を獲得できるのである。サービ斯拉ーニングはより意図的な経験であり、その経験が学生に対して要求するのは、その地域の組織で働きながら、教室での知識や大学での資源、その特定の要求に応用していき、それを達成していくことである。

これらのプロジェクトが目指すのは、自分たちが最終的に奉仕することになるだろう人間への学生自身の市民的参加ないし感謝の強化である (Ball, 2008; Peterson 2008)。

インターンシップというものは、他の学生向け経験的な学習活動に比すれば専門家に主導される経験を提供している。学生は情報組織の日常業務にどっぷり浸かることになり、そこで専門職の仕事を経験し、多様な模範となるロールモデルを観察し、そして理論や学術的厳密性を実践に落とし込むのである。省察的实践と呼ばれる技術 (Schön, 1983, 1990) と合わせることで、学生は授業ベースの課題がもたらすよりもはるかに深いレベルでの技術性の獲得へと近づくことが出来るのだ。省察を行なうことの有効性は英国で行われた LIS 実習生による二つの深い研究によって裏付けられている (Sen and Ford, 2009)。

インターンシップの経験は通常その期間を一つの図書館ないし情報機関の中で完遂される。Coleman (1989) の報告によると、ほとんどのインターンシップにおいて学生は給与ないし賃金で支払いを受けていないのだが、学生にインターンシップ手当てを支払う施設もある。例えばペルーでは政府の要請により、実習生は有給のスタッフの職を守るために有給であるとされた (personal communication)。

インターンシップに参加している学生は、しばしば、(インターンシップで) 要求を満たすために地元の、物理的に同じの場所で仕事をしている。北米の LIS 教育はオンライン環境での提供が増えているので、今では学生は物理的な場所に足を踏み入れることなく学習課程を修了させることができる。一方で、インターンシップ経験の本質において同じような変化があるという証拠はほとんどない (Oguz, 2013)。オンライン主導のインターンシップの個別事例として、例えばインターネット公共図書館 (Internet public library) は LIS のデジタルライブラリアンシップの技術を教えるための場として利用されてきた (Lin and Abel, 2010; Mon et al., 2008)。国際的なインターンシップの例もあり、特にブリティッシュ・コロンビア大学は有名なのだが、そうした経験に関する参考文献は殆どないか、あるいは全くない。

新しいインターンシップの可能性のための四つの I についてのモデル

21 世紀の LIS 教育のためのインターンシップを概念化している論文で、Bird、Chu そして Oguz らが、学生に対して多く豊かな学習機会を供給するためのアイデアを輪郭付ける。それは I から始まる四つの英語概念を用いている——計画的 (Intentional)、相互接続的 (Interconnected)、学際的 (Interdisciplinary)、国際的 (International)。

さてこのように、インターンシップは計画的である経験を含むように再概念化されるのなら、計画的であるため、学生、LIS 教育の教職員、実務者は、その目的及びそれを達成する

ために用いられるだろう過程、そして各々の参加者の役割についてははっきりとした考えを有することになる。次に参加者は対話の共有と共同学習の成果を通じた自身の仕事の中に相互接続性を提示しなければならない。加えてインターンシップは、幅広い専門領域を覆うような時間としての LIS の固有の性質を反映するために学際的でなければならない。最後に、経験は国際的であるべきだ。そうすることで学生は自分たちの地域の状況を超えた見通しを得て、国際的に結びついた情報環境に備えることが出来る。これからのインターンシップの適切な方向性を導くそれらの概念は、ICTs（情報通信技術）の利用可能性と安価性の増大を通して、より実現性を高め、インターンシップの適切な方向性を導くものとなっている。

一つのインターンシップがこれら四つ全ての特質を有していることは滅多にないが、幾つかのプロジェクトは導入可能性を強調する例として引用されている（Bird et al.）。リアル・ラーニング・コネクションズ・プロジェクト（RLCP）、つまりグリーンズバラのノース・カロライナ大学グリーンズボロ校の大学図書館と LIS 部門の共同事業は、計画性、学際性、相互接続性をはっきり示しているものとして例に上がっている（Bird and Crumpton, 2014）。他幾つかのプロジェクトは国際的な経験を供給するためのヴァーチャルな結びつきの利用可能性を強調している。（Lin and Abels, 2010, Mon et al., 2008）

プロジェクトに基礎づけられたプログラム、即ち RLCP は、2010-2011 以来毎年三つのインターンシップの内一つを主催して提供するものとして提案書を提出していたことにより、計画性の重要性を証明してきている（Bird and Crumpton, 2014）。この計画的に考案されたプロジェクトは、部門全体からの引き受けと達成目標を個別に持つ、ある特定の参加者に集中させるという点において、特定の学生との非公式な約束事とは対照的であった。これらの機会に参加する学生の選択もまた計画的であった。なぜなら LIS の学生たちは、履歴書及び参加目的を概略した添付書類の提出によって、狭い枠を狙って競合していたためである。さらに LIS 参加者と教員陣との関係もまた計画的であり、その学生はインターンシップ経験を補完するだろう特定の教室に登録することになっていたためである。加えて参加者のうち教員陣と学習者は、どのようにカリキュラムは学生と実務者が参加する活動に対応し、いかに変化し得るかについての学習目標を持っていた。

公文書館や特殊なコレクションで主催されてきた RLCP インターンシップの幾つかでは RLCP の学際性は自明のことであった。これらのインターンシップでは、LIS プログラムや公文書館の学生プログラムで訓練された実務者、そして歴史家としての実務者が入り混じっていた。各々のインターンシップ内には LIS 部門が提供する訓練と、実務者を背景とした訓練との調整がある。こうした実例においては、教員陣のメンバーは自身もどっぷり浸かることで、学生と実務者との間に結果として存在する学術分析の違いの橋渡しをすることで参加、もっと関わるように努力していた。多くの図書館、公文書館、博物館が特にデジタルな環境では現在融合しているにもかかわらず、文化遺産の複数の領域を統合するためには教育、実践においてなすべきことは多い（Marty, 2010）。

相互接続性は RLCP のあらゆるところで常にテーマであり続けた。10 のプロジェクトにおいて、全ての参加者、つまり教員側のアドヴァイザー、専門職の監督者、そして実習生はこの経験から獲られる深い学習に関心を持ってきた。あるプロジェクトでは、学生は音楽の訓練をしている一方で、実務者は幾つものデジタルなプロジェクトを経験した図書館員であった。このチームはチェロの名奏者と彼の音楽とを紹介する特別なデジタルコレクションを完成させることができた（University of north Carolina at Greensboro university libraries, n.d.）。さらなる相互接続性の例としては、幾つかのインターンシップ経験が学生によって独立の研究へと繋がったというものがある。こうした独立した仕事は教科課程や更

なる現場への情報提供のために用いられ得る。加えて実務者たちは——その一部は終身在職権を得ようとする職であったが——プロジェクトの期間中出版可能なレベルの研究を完成させることができた。

地域均衡を超えた経験は限られた形の国際的なインターンシップを通して積まれてきた。ICTs の利用によって、ヴァーチャルなインターンシップは経験学習の新たな機会を供給している。ヴァーチャルなインターンシップという概念は比較的新しい響きに聞こえるかもしれないが、離れたところで仕事をこなし、経験を獲得するというアイデアを強調することは今ではより現実的なものとなっている。ブロードバンド・インターネットやコンピュータ機器の増大する利用可能性のおかげで、組織や人間はより相互的に結びつくようになったので、情報機器を用いた在宅勤務は仕事場の大きな部分を占めている。ユーロピアン・ユニオン・ファンデッド・プロジェクト、エンタープライズ・ユニヴァーシティ・ヴァーチャル・プレースメント（EU-UV）は学生をヴァーチャルな仕方で国境を越える様々な組織へと送る試みにおいて配置し、そうして学生は、居住の国から離れずして、国際レベルの能力及び技術を強化することができる（Vriens et al., 2010）。学生はウェブ／ビデオ会議を用いて雇い主のサイトから面談を受け、各自現場へと配置される前に、初歩的な訓練がオンラインで提供される。仕事の全てがヴァーチャルに行われるわけだ。

アメリカのインターネット・パブリック・ライブラリー（IPL）は LIS 学生にヴァーチャルで国際的なインターンシップ経験を供給している。IPL は LIS 学生をデジタル・レファレンス・ライブラリアンとして役立つように雇っている（Lin and Abels, 2010; Mon et al., 2008）。学生は図書館の e メールでのレファレンス・サービスという日常業務が機能する様の責任を負う。たいていは若い十代の国際的な利用者を手助けしながらの業務となる。例えばバルドスタ州立大学において何人かの LIS 学生は IPL でのインターンシップ経験の要求を成功裡に収めた（パーソナル・コミュニケーション）。

合衆国ジョージア州のガリレオ・ナレッジ・リポジトリも、州規模のデジタル・リポジトリの試みの一部としてヴァーチャルなインターンシップを作った（Yang, 2012）。選ばれた学生はオンライン会議を用いて訓練を受ける。またこの訓練は電子的な課題読書とチューターによる個別指導を合わせることで補完されている。この訓練を行う上で、学生は参加する施設に配置され、雇われ先の施設のデジタル・リポジトリの日常業務を行う。学生は自分の仕事をヴァーチャルに行い、雇われ先の施設とのコミュニケーションは電子的に、もしくは通話によって継続する。さらに学生は、疑問関心へのサポートを受けるためには居ながらにして教員のメンバーと連絡を取り続けている。

図書館員をオンライン学習マネジメントシステムに組込むという現象はアメリカ合衆国では増加してきており、またヴァーチャルなインターンシップの機会を提供している。地域的なコミュニティカレッジの図書館と LIS プログラムとが協働して行う最近のインターンシップは、こういうことも上手くやれることを証明した（Coltrain, 2014）。オンライン・コミュニティ・カレッジ・スチューデントの増大する需要に対処すべく、実習生は採用され、その目的はレファレンス・クエスションへ回答し、教育を提供し、学生の研究プロジェクトの支援を行うように訓練される。

インターンシップの現状概観

上記の通り、四つの I の概念モデルはインターンシップの機会の計画を示すのに便利ではあるが、LIS プログラムが実際にこうした環境を促進しているのかを判断する証拠を文献に見つけることはほとんどできなかった。インターンシップ経験において国際的に再デザイン

され得るか否かを理解するための始めの一步は、複数の国家における経験の現状を理解することであり、ここに提示される本研究は国際的な場での LIS プログラムにおけるインターンシップの特質を記述する試みである。特に必要要件、国際的ないしヴァーチャルな利用可能性、またそうしたものの導入という観点から行うものである。

方法論

近年の研究は、複数の方法を混ぜ合わせたアプローチによって世界的な図書館教育におけるインターンシップの特質に関する証拠を求めている。アメリカ図書館協会（ALA）に認可されたアメリカ合衆国やカナダのプログラムは過去に調査されているのだが（Clowley, 2004; Hall, 2009）、調査チームはまずそれらの学校のウェブサイトから集められるインターンシップの情報を更新することを求めた。特に調査者が探し求めたのは、インターンシップは要求されていたのか否かということと、ヴァーチャルないし国際的経験への言及である。

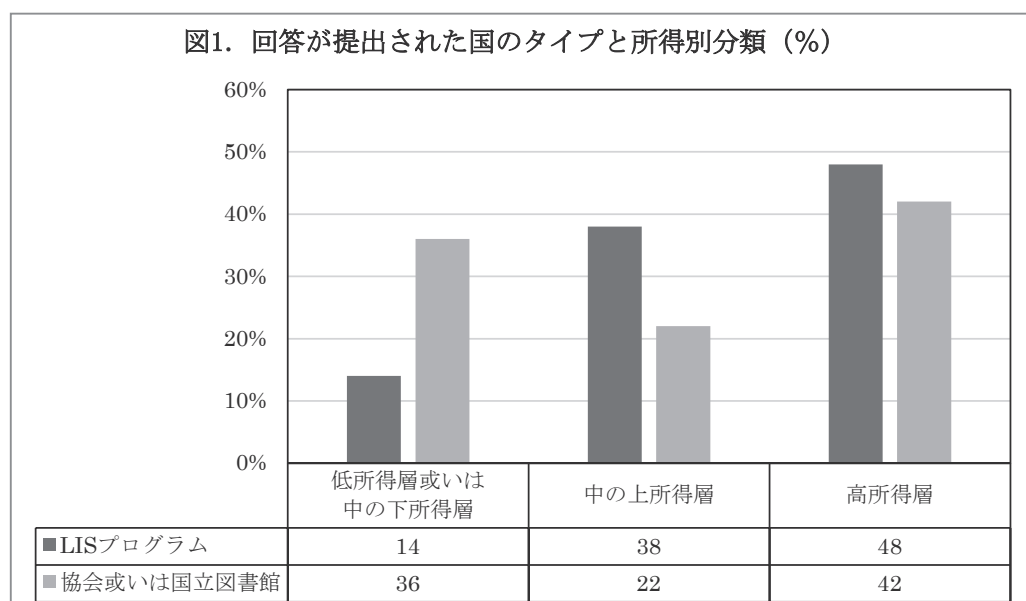
アメリカ合衆国とカナダ（以降は北米とする）を越えて視野を広げるために、IFLA に資金提供を受け、その教育訓練部門（SET）が後援についた調査が作成され、北米以外の LIS 教育プログラム及び世界の国立図書館そして図書館協会それぞれに配布された。最多国数まで及ぶために、427 の潜在的な国際的調査受領国の最初のリストが作成された。それは『world guide to library and information education』という出版物の検討とウェブサイトから、アドレス、問い合わせ用アドレス、その他の情報を更新することによって作られたものだ。第一段階では、（100 を超える学生がいる）主要な教育プログラムが選ばれた、ただしそのプログラムがある特定の国にとって唯一の例であった場合は除いた。3 か月後、追加として小規模な教育プログラム及び協会が連絡リストに加えられ、e メールがそれらのアドレスに送られた。調査は 2013 年の夏と秋の二回配布され、eメールの接触による調査の内、返信がその個人ないしプログラムから来たものは除外していった。それぞれの参加依頼は 3 通の追跡メールを伴っていた。さらに調査者は追加データの獲得のために IFLA の SET のメンバーと直接接触した。

課題の重点はそれぞれの大学におけるそれぞれの学位プログラムのためのインターンシップを含んでいる。インターンシップは今回の調査のいたるところで使われている語であるが、それは英語でのみ拡散された。参加者は自身の学校において拡散可能な任意の学位プログラムを名付けることを許され、またこのことは多様性に富んだ様々な名前を生んだ。分析は、あまりに文書館的で情報管理的なその他の学位プログラムではなくむしろ、資格、学部、修士といった学位のレベルによってなされた。そして、その他の学位は、図書館学に集中したものと併せて分析に含まれているかもしれない。

調査参加者の統計データ／収入による特徴づけ

135 件の応答があった。69 か国の少なくとも一つから反応があり、55 か国から来た 98 の LIS プログラム、11 の国会図書館、23 の図書館協会からなるものである。応答した国の全リストは補遺 A にある。データセットに基づいて現れてきた国々は、世界銀行による世界経済の分類——2012 年における一人当たりの国民総所得による——に従ってグループ分けされている。1035 ドル以下は低所得グループ、1036 ～ 4085 ドルは中の下所得グループ、4086 ～ 12615 ドルは中の上所得グループ、12616 ドル以上は高所得グループに含まれる（country and lending groups, n.d.）。分析の目的のために、低所得と中の下所得は合わせて低／中の下所得国とする。調査の回答は LIS プログラムか、国立図書館あるいは各国の図書館協会かで区別される。図 1 に示されるように、この調査グラフのサンプリングでは

高所得国からの応答がより多い（LIS プログラムは 48% で、協会あるいは国立図書館が 42%）。低／中の下所得国からの回答は協会あるいは国立図書館のものがより多い。



結果

文献再調査と調査の結果によって LIS 教育におけるインターンシップの国際的状況での全体図を描き出している。結果は北米の大学とそれ以外の国家で分かれている。国家図書館あるいは協会からのみ集められたデータについてはその都度テキスト内で注釈する。

ALA認可(北米)プログラムの結果

北米 LIS プログラムの資料再調査によれば、学校図書館での仕事を目指す学生を除くと、インターンシップは 59 プログラム中たった 10 (17%) にしか要求されていなかった。興味深いことに、メリーランド大学では学生がプログラム内の修士論文を書かないプログラム (non-thesis option) を選択している時のみこの要求は必修なのである。一方でデンバー大学では、プログラムではなくまとめのプロジェクト (capstone project) に代替できる。さらにこの再調査の中で注目すべき事実は、いくつかの代わりとなる言葉が用いられていたことだ。「フィールドワーク」、「現場経験」、「実習」(Coleman, 1989) に加え、「専門的なフィールドワーク」、「専門的な現場経験」、「協同組合」(協同的な教育)、「臨床経験」も含む。

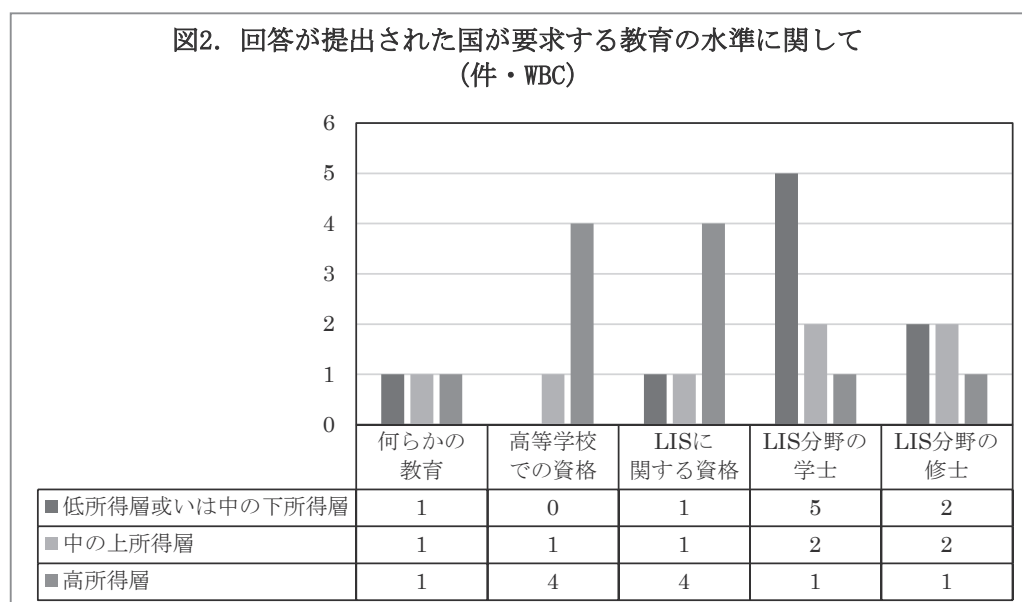
加えて、ヴァーチャルないし国際的な経験は利用可能であった、あるいは促進されていたと、とりわけて記したのは 59 プログラム中たった 3 つ (5%) だけだった。ブリティッシュ・コロンビア大学はとりわけて注目する価値がある。なぜならそのインターンシップに関する資料で以下のように特別な言及をしているからである。「地域性の制限はないのだ……配置はほとんどどんな州でも、また多くの外国の国でも、アレンジされてきた」(University of British Columbia School of Library, Archival and Information Studies, n.d.)。同様にシラキュース大学は「インターンシップや協同的な教育はシラキュース地方内で地域的にも、国家的にもできたが、国際的にさえできた」と留意している (Syracuse University Course Catalog, 2012)。少数のプログラムが留学の機会について幾つかの実践的側面と共に言及してくれたが、それらは外国での十全な職業経験ではないので、ここではカウントしなかった。

59 のプログラムで、その資料の内でヴァーチャルなインターンシップの可能性について

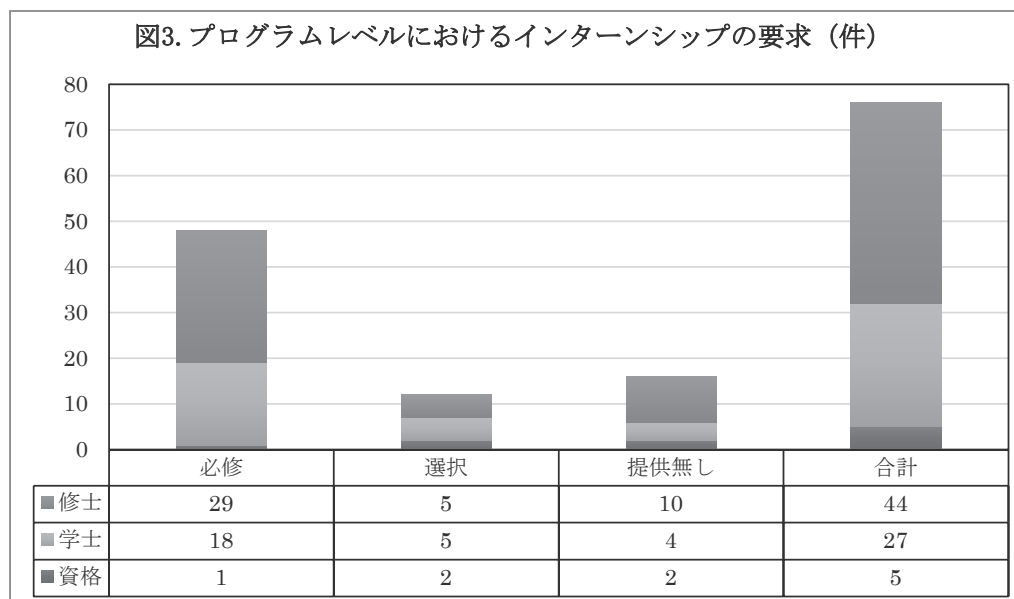
言及するものは稀であった。たった三つあっただけである。ケンタッキー大学はヴァーチャルなインターンシップをすることはできないと指摘した。一方カナダのアルバータ大学と合衆国のサンノゼ州立大学はこの可能性を認めた。ほとんど全てのプログラムがオンラインの学位を提供していることを考慮すれば、公的なプログラム資料にいかなる言及もないというのは注目すべきである。

北米以外：調査結果

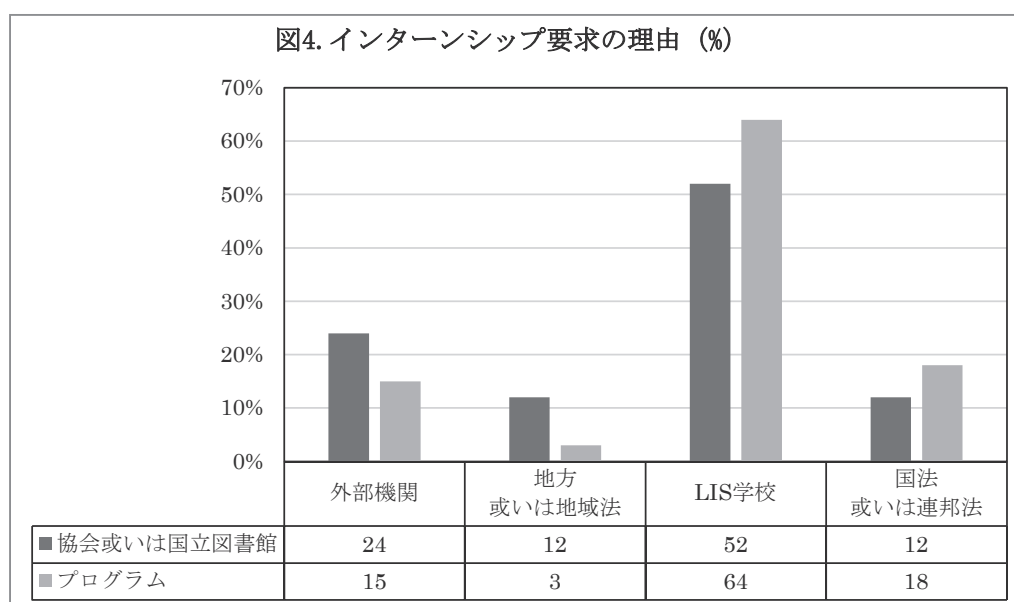
比較のために、北米の雇用者は専門職のための修士号への希望選好をしばしば示し、ヨーロッパは近年ボローニャ・プロセス (Ratxek, 2006) の原則が採択されているという事実
に照らし合わせたなら、LIS における修士号について集められたデータへと、次に示す結果がまとめられる。他のレベルの教育に関するデータはここでは深く分析しないが、入手可能なところでは提示するものとする。一つの問いは国立図書館と協会 (n=11) に対してのみ質問された。その問いは回答してくれた国の中で図書館で働くために求められる教育レベルに関するものである。結果は国の所得によって分析され、図 2 に報告されている。



調査では、その国においてインターンシップは学位取得のために要求されているかどうか、またされているならどのプログラムレベルにおいてか、を質問した。特に修士レベルに注目してみると、図 3 に見られるように、図上で示された国のほとんどがインターンシップは必要とされると述べている。ALA 認定プログラムの調査結果と比べると、インターンシップが必修であることは諸外国においてより一般的なものである。しかし応答してくれた国々の 11% (44 中の 5) において、インターンシップは自由選択であり、23% (44 中の 10) では、修士号のプログラムの一部として提供されていない。資格と学位の必修は図 3 に示されているが、アメリカの文献再調査内に含まれていたのは修士のプログラム、専門職だけだったために、これを北米の結果と比較することは出来ない。

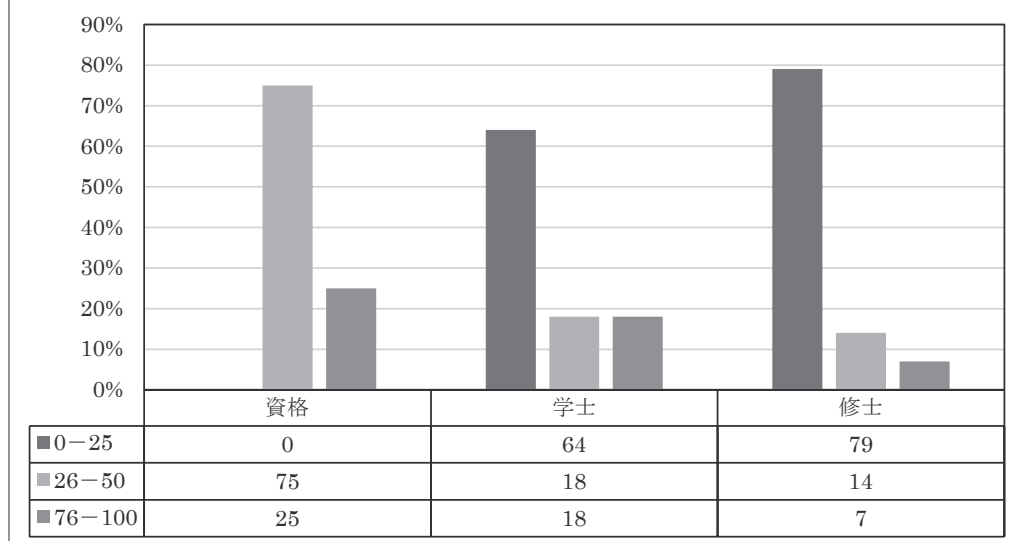


回答者には、そうした必修が実際になされている場合、その理由を示すよう求めている。図4では、その結果が、国立図書館あるいは協会が理由として報告したもの、と、LISプログラムが理由として述べたもの、とで分かれている。おおむね、LISプログラムは要求をプログラムとしての決断に帰しているが、一方で国立図書館と協会は、インターンシップは外部機関や国法ないし連邦法によって必修を求められているというものを含め、複数の回答をしている。



LISプログラムの回答が、インターンシップは必修とされていない、と記した時には、学生参加の見積もりを問う追加質問を提示した。図5のデータが示すには、修士レベルにおける最大の応答(89%)は、学生の25%以下はインターンシップの機会が任意であった場合これを活用すると見積もっている一方で、多くの学生が選択的なインターンシップに参加するだろうと述べたのはわずか7%である。資格のプログラムはより高い参加率を報告しているが、これはひょっとしたらこれらのプログラムでは学術的なものを強調しないからなのかもしれない。

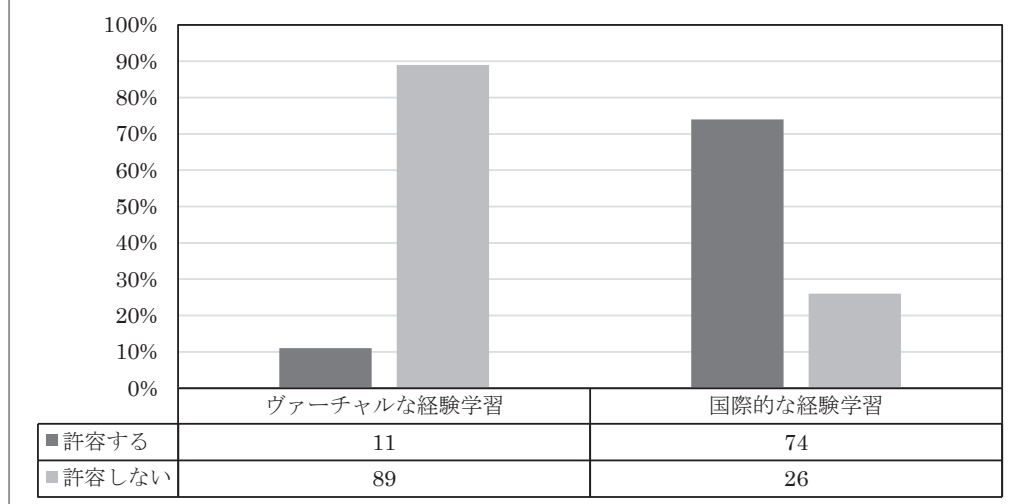
図5. 自主的なインターンシップへの学生の推定参加率 (%)



ヴァーチャルないし国際的なインターンシップは許容されるか？

北米の LIS プログラムの結果と似ていて、ヴァーチャルなインターンシップを許容すると報告した調査への回答者はほとんどいなかった（図 6 を見よ）。他方で、74%が国際的な経験は許容されると示された。これらに参加する学生の数とそうした参加の性質については本調査では調べられなかった。

図6. ヴァーチャルもしくは国際的なインターンシップの経験を許容するかしないか



議論

調査の小部分ではあるが、図書館での雇用のための専門的準備で要求されるものにおいて、応答してくれた国々全域にわたって大きな幅を、示す結果となった（図 2 を見よ）。世界銀行によって国を見ると、データは裕福な国ほど修士レベルの学位を要求する傾向が強いことを示している。しかしながら合衆国の I-school における情報学士の増大、ヨーロッパでボローニャ・プロセスの結果は LIS 教育の全体像の変化が明らかとなっている。北米における LIS プログラムは、修士レベルの教育強化のために何らかの職業経験を提唱している Berry (2005) のような実務者の呼びかけをよそに、インターンシップを自主的な経験

として提供し続けている。しかしながら国際的にはインターンシップの必修のための強力な支援は、プログラムによってであれ法律によってであれ存在する。事実、今回のサンプルの65%以上はこうした必修科目をすでに有しているのだ。こうした必修科目はどのようにして満たされるのか、また要求される機会に対して学生はどのように反応するのか、に関する詳細な追跡調査は必要である。Grogan (2007) が自身の知見に富んだインターンシップの歴史の中で必要とされる経験について述べているように、多くの学生が自分たちは時々無駄なプロジェクトを押し付けられていると感じている。これには、職業経験が始まる前に計画性という概念を学生や管理者に紹介してやることで反論できる。仕事の監督者と学生双方が、その経験を行っていく中で、相互に学習できるような約束は一番最初にはっきりさせておく価値のあるものだ。それにより省察的活動はより深い学習へとつながっていく (Bird and Crumpton, 2014; Sen and Ford, 2009.)。

インターンシップが要求されていない時の学生の不参加は、計画性と相互接続性を強化するような経験を構築していくことの重要性を如実に物語っている。学生の LIS 教育を超えた将来の目標と、インターンシップの短期的な経験との接触は、LIS プログラム側の強い計画性により更に強められる形で実現する。同じ様に、組織的な受け入れ者は、学生の仕事がその施設、そして学生を訓練するのに時間を提供してくれる管理者の目標を満足させるということを、感じなければならない。成員全てのための互恵的な目標を計画的に設定することが——それは上述のリアル・ラーニング・コネクションズ・プロジェクトにおいてなされていたことである (Bird and Crumpton, 2014) ——よりよい必要とされる経験を想像できる。

LIS 教育における e ラーニングの配備は増加しているにもかかわらず、ヴァーチャルなインターンシップのための公的支援は明らかに欠如している。ひょっとしたら上述のケーススタディとなる例のように、より多くの成功した実習の配置の文献があるのなら、それらがもっとより多くの学生のためにどのように働くのかに関するよりよい理解をもたらすだろう。Coltrain (2014) が指摘するように、ヴァーチャルの実習生は資金不足の施設にとっては歓迎すべき追加資源になるのであるが、確かに経験学習としてのインターンシップの多様な側面についての更なる研究は必要とされている。例えば、受け入れ側となる施設にとってのインターンシップの費用対効果、全参加者にとっての価値、達成される学習の幅、報酬の必要性、対面の経験とヴァーチャルな経験との比較検討などである。

国際的な経験のためのはるかに強力な支援はあったのだが、我々はこれらの準備がどのように促され達成されたのかについての情報をほとんど持たない。北米の学生には旅行や食事、その他の参加に関係した費用の支援はほとんどない。その結果こうした機会を利用する余裕のある人はほとんどいないということになる。加えて、利用可能なプログラムを捜し出す学生のための中心的な場もないのだ。様々な国における LIS プログラム同士のパートナーシップが、こうしたよりよくより多くの前進する機会を作るために機能していくだろう。

将来の研究のための勧告

ICTs はコミュニケーションや情報へのアクセスだけでなく、教育へのアクセスもまた強化してきた。ここで報告された調査結果の上に積み重ねられる調査は、経験学習の様々な側面だけでなく、オンライン教育プログラムがどのようにしてインターンシップやその他の経験学習の様式を効果的に提供するのかも検討していく必要がある。このような国際的研究は課題に直面する。それらの課題は次のようなことによって引き起こされ得るものかもしれない。即ち、言語、専門用語、異なった学位ないしプロフェッショナルな訓練の要求事項、

LIS 専門職の身分、世界中に見出されるより高等教育政策の多様性に起因するかもしれない課題が待ち受けている。例えば、「インターンシップ」という語の使用は予想できない形に結果を歪めるかもしれない。それぞれのインターンシップは有給か否か、いつそれらは要求されたか、それは全学生向けのものか、それとも準専門職の経験を伴った学生は免除されるのか、こういうことを知ることもまた役に立つのだろう。以上は本調査が取り組めなかった、が研究に値する領域である。

複数言語での調査はより幅広い回答者を作ることが出来るかもしれない。海外留学プログラムの役割を異国での職業経験の前奏曲としてよりよく理解することは、増加する国際的経験のために有価値であろう。明らかに、合衆国の外の LIS プログラムにおいて提供される様々なプログラムをより深く理解することは、とりわけ学際性の問題に取り組むために、有益であろうし、今もなおよりよいインターンシップの魅力的な部分であろう。しかし、今回の特定の調査はこれを達成することは出来なかった。

計画性の概念は学生、専門職の管理者、教員のアドバイザーにとってのインターンシップの価値を研究することによって探求できる。それは関係者全員の期待を満足させたか？相互接続性の概念に取り組むであろう実践と理論との結びつきについて学習及び、あるいは理解の共有はあったか？

最後に、オンライン教育によって利用可能となる機会が増える事に注意を払う必要がある。こうしたプログラムは学生にヴァーチャルなインターンシップを提供できるし、またそこにはもはや地理的な制限のないことを考えれば、国際的な経験学習のための機会が現実味を帯びてくる。インターンシップの四つの I（学際性、計画性、相互接続性、国際性）を吟味した研究は、教育者や学生によりよい経験学習を設計するために必要な情報を与えるだけでなく、そうした経験学習が 21 世紀の文脈において有意義になることを確かなものにするであろう。

補遺A：調査サンプルを提供してくれた国々

Australia, Austria, Belgium, Brazil, Bulgaria, Canada, China, Colombia, Croatia, Cyprus, Czech Republic, Denmark, Djibouti, Egypt, Estonia, Finland, France, Gabon, Germany, Greece, Hong Kong SAR, Hungary, Iceland, India, Ireland, Italy, Jamaica, Japan, Kenya, Latvia, Lebanon, Luxembourg, Malaysia, Maldives, Malta, Mauritius, Mexico, Micronesia, Mongolia, Namibia, Netherlands, New Zealand, Nigeria, Norway, Pakistan, Palau, Papua New Guinea, Peru, Philippines, Portugal, Romania, Slovakia, Slovenia, South Africa, Spain, Sri Lanka, St. Vincent and the Grenadines, Sweden, Switzerland, Taiwan, Thailand, Turkey, Uganda, UK, Uruguay, Vietnam, Zambia, Zimbabwe.

謝意

本研究は一部 IFLA の教育訓練分科会 (SET) の支援を受けている。Michelle Folkman と Senem Acar は潜在的な回答者リストを作成した。

参考文献

- American Library Association, Office for Accreditation (1992) *Standards for Accreditation of Master's Programs in Library & Information Studies*. Chicago : American Library Association.
- American Library Association, Office for Accreditation (2008) *Standards for Accreditation of Master's Programs in Library & Information Studies*. Chicago : American Library Association.
- Ball MA (2008) Practicums and service learning in LIS education. *Journal of Education for Library and Information Science* 49 (1) : 70-82.
- Berry JN III (2005) Editorial : The practice prerequisite. *Library Journal* 130 (15) : 8.
- Bird NJ and Crumpton MA (2014) Real learning connections : Questioning the learner in the LIS internship. *Journal of Education for Library and Information Sciences* 55 (2) : 89-99.
- Bird NJ et al. Four I's of internships for the new society : Intentional, interconnected, interdisciplinary, and international. In : *Proceedings of the World Library and Information Congress : 77th IFLA General Conference and Assembly*, San Juan : Puerto Rico.
- Coleman JG (1989) The role of practicum in library schools. *Journal of Education for Library and Information Science* 30 (1) : 19-27.
- Coltrain M (2014). Growing embedded librarians like kudzu : How the embedded extension service creates more embedded librarians without creating new positions. *Journal of Library and Information Services in Distance Learning*. 8, 204-215.
- Country and Lending Groups | Data (n.d.) Available from : <http://data.worldbank.org/about/country-and-lending-groups> (accessed 21 April 2015).
- Crowley WA (2004) *Spanning the Theory-Practice Divide in Library and Information Science*. Lanham, MD : Scarecrow Press.
- Grogan DJ (2007) Education for librarianship : Some persistent issues. *Education for Information* 25 : 5-26.
- Hall RA (2009) Exploring the core : An examination of required courses in ALA-accredited. *Education for Information* 27 (1) : 57-67.
- Howden N (1992) Practicums and field experiences. *Journal of Library Administration* 16 (1-2) : 123-140.
- Kolb DA (1984) *Experiential Learning : Experience as the Source of Learning and Development*. New Jersey : Prentice-Hall.
- Kolb DA et al. (2000) Experiential learning theory : Previous research and new direction. In : Sternberg RJ and Zhang LF (eds) *Perspectives on Cognitive, Learning, and Thinking Styles*, New Jersey : Lawrence Erlbaum.
- Lin X and Abels E (2010) Digital library education lab. *Journal of Education for Library and Information Science* 51 (2) : 120-124.
- Marty PF (2010) An introduction to digital convergence : Libraries, archives, and museums in the information age. *Library Quarterly* 80 (1) : 1-5.

- Mon L et al. (2008) Remote reference in U.S. public library practice and LIS education. *Journal of Education for Library and Information Science* 49 (3) : 180-194.
- Oguz F (2013) Who do you know? A study of connectedness in online education and employment. *Education for Information* 30 (3-4) : 129-148.
- Peterson L (2009) A brief history of service learning in LIS. In : Roy L et al. (eds) *Service Learning : Linking Library Education and Practice*. Chicago : American Library Association.
- Ratzek, W (2006). 'Characteristics of German library science : sharing lessons learnt with the international community in C Khoo, D Singh & A Chaudhry (eds.), *Proceedings of the Asia-Pacific Conference on Library & Information Education & Practice 2006 (A-LIEP 2006), Singapore, 36 April 2006*, School of Communication & Information, Nanyang Technological University, Singapore, 503-512.
- Schön DA (1983) *The Reflective Practitioner : How Professionals Think in Action*, New York : Basic Books.
- Schön DA (1990) *Educating the Reflective Practitioner : Toward a New Design for Teaching and Learning in the Professions*. San Francisco : Jossey-Bass.
- Searing SE and Walter, Scott (2013) Is experience the best teacher? Field experience and student learning in LIS education programs. In : *Proceedings of the 2012 Library Assessment Conference : Building Effective, Sustainable, Practical Assessment*, Charlottesville, VA : Association of Research Libraries, pp. 207-219, Available from : <http://libraryassessment.org/bm~doc/proceedings-lac-2012.pdf> (accessed 10 March 2015).
- Sen B and Ford N (2009) Developing reflective practice in LIS education : The SEA-change model of reflection. *Education for Information* 27 (4) : 181-195.
- Syracuse University Course Catalog (2012)
http://coursecatalog.syr.edu/2012/programs/library_and_information_science
(Accessed April 28, 2015)
- University of British Columbia School of Library, Archival and Information Studies (n.d.). Available from <http://slais.ubc.ca/libr595/>. (Accessed April 28, 2015).
- University of North Carolina at Greensboro University Libraries (n.d.). Available from <http://libcdm1.uncg.edu/cdm/greenhousepapers/collection/Greenhouse>. (Accessed April 28, 2015).
- Vriens M et al (2010) Virtual placements : Improving the international work experience of students. In : *Proceedings of the international conference on education and new learning technologies*, Barcelona, Spain.
- Yang C (2012) A reflection on the Galileo Knowledge Repository (gkr) Virtual Internship. *Georgia Library Quarterly* 49 (4) : 1-3

著者略歴

Nora J. Bird はグリーンズボロのノース・カロライナ大学における准教授兼学部生の指導員である。ラトガース大学から PhD を、シモンズカレッジから MSLIS を取得した。研究領

域はコミュニティカレッジのライブラリアンシップであり、専門職教育におけるインターンシップの役割や、科学情報へのパブリック・アクセスについて研究している。

Clara M. Chu はイリノイ大学アーバナ・シャンペーン校の国際図書館プログラムのためのモートソンセンターの責任者であり優れた教授である。ウェスタン大学（カナダ）からMLSとPhDを取得している。Chu博士の専門は、多文化コミュニティにおけるアクセスと集合的記憶に作用を与えるような、図書館と情報の利用・実践・システムの社会的構築である。彼女のトランスナショナルかつ民族的少数民としての、多言語的な背景は、情報に変わる問題の社会調査において、優れた批判的なレンズを生み出し、専門的実践と教育を国際的に変革を進めるものである。民族・地域・国内、そして国際的な専門職の図書館情報協会において、Dr. Chuは継続的にリーダーの地位を有している。

Fatih Oguz はグリーンズボロのノース・カロライナ大学における図書館情報学部の助教授である。北テキサス大学からMLS及びPhDを取得した。その研究が取り扱うものとして、情報とアクセス、そしてより特化する形で、三つのアクセスのパラメータ、すなわち、情報への物理的アクセス、知的アクセス、社会的アクセスに関して問うている。現在は社会関係資本と電子図書館を重点に置いた、オンライン学習における情報アクセス問題を研究している。

考察(小出)

この論文はLIS教育のためのインターンシップを四つのIの概念モデル——計画的、相互接続的、学際的、国際的——の分類に則し、収集した統計データからLISプログラムの現状を概観、特徴づけを行うものであった。これにより、広範的なインターンシップの要求状況と支援体制、そしてヴァーチャルなインターンシップに対する国際的な論調の一端をうかがい知ることが出来た。

だが、この四つのIの概念モデルに際しての課題意識は必ずしも四つが同様の形で深められているわけではない。例えば、計画性と相互接続性は、インターンシップの道筋と目標、フィードバック性の向上により、学生や実務者に対してインターンシップの価値や理解が高まる可能性が示されている。国際性に関しては、LISプログラム間のパートナーシップと支援の拡充、そしてヴァーチャルな経験が国際的な経験になりうるのか、その代替性に関する可能性の考慮が今後の課題として勧告されている。この三つのIの概念モデルは互惠関係を有していた。

しかし、学際性に関しては論中では統計データを活かすような展望、ないし勧告が示されなかった。概念モデルを提示した際の個別の説明として、公文書館や特殊なコレクションにおける広範な知識の獲得や、学生と実務者間にある学術分析の溝を教員が解消することが期待される、ということが語られたのみである。

では、学際性を他の概念モデルと同様にBird氏の展望に組み込んだ場合、どのようなものが想定されうるのか。簡単なものとして考えられるのが、図書館を主としながらも社会教育施設の連携を前提とした専門知識を学ぶ場や機会を設けることであるだろうか。それこそ、論中でも語られているように、デジタルな環境では一定の融合を見せており、私の知る範囲でも各社会教育施設間の連携として、日本国内の地方レベルでは図書館と博物館、各種記念館のネットワーク構築が行われている。それをLIS教育の一環としてどこまで組み込めるか、どこまで専門領域の教授を行うべきなのか、そしてインターンシップとして組み込めるか、などが問われることになるだろうか。ともあれ、専門性を確立するための繋がりや経験は図書館界だけではなく、デジタルな環境下で繋がり拡がった他の社会教育機関との横の関係も考えなくてはならないのかもしれない。